

佳作

大きな存在

愛媛県 済美高等学校一年 井本 麻鈴

「もう、わかったけん。」

また言ってしまった。

私は、中学生のときお母さんの話に反発ばかりしていた。五人兄弟の真ん中で、上の兄と姉とは年が離れていたから、いつもお母さんに、「ちゃんとして、お姉ちゃんなんやけん」と怒られて私のことなんか構ってくれなかった。両親は共働きだったから、自分が洗濯物干しやお風呂掃除をしなくちゃいけないかった。

中学三年になって、高校受験がせまっていた。私は、中学二年のころから思い描いている夢がある。それは、国際貢献できる仕事に就くことだ。両親に、話そうかと悩んでいた時期もあったくらい本気で考えていた。でも、真剣な話をするのは恥かしかった。ずっと、お姉ちゃんとしてしっかりしなくちゃと思っ、強がっていたからだ。

高校は、金銭面的にも家からもっとも近くて、お母さんの母校でもある日高校に行こうと考えていた。でも、

本当は夢に少しでも近づけるように、英語を重点的に学べるコースがあるA高校に行きたかった。A高校は私立だから金銭面はともかかると、家から遠くて寮になっってしまう。それでも諦められなくて、両親に話すことにした。いつもと同じように、「お姉ちゃんなんやけん、自分だけじゃなくて下の妹や弟のことも考えて」って言われるとばかり思っていた。

でも、違った。お父さんとお母さんは、真剣に聞いてくれて、応援すると言ってくれた。本当に嬉しかった。それから毎日、お父さんとお母さんの話し声が聞こえた。

「あの子は、しっかり者やけん大丈夫。」

「我慢ばっかさせとったな。」

っていう声が聞こえて、ちゃんと見ててくれてたんだな、と思っ胸がいっぱいになった。

それから、A高校に受かるように勉強に励んだ。正直、両親とか友達とか知っている人がいない所に行きたくて勉強していたのもあった。

試験当日の日、お母さんとJRで向かった。前日は、緊張で胸がバクバクだった。でも、お母さんがいるって思ったら、緊張がなくなっ逆にな自信が湧いてきた。面接は全く緊張せず、楽しく出来た。これも全て、お母さんという大きな味方が付いていてくれたからであろう。

受験結果は合格だった。自分は行きたい高校に行ける

ことに嬉しく思ったのと同時に、罪悪感のようなものを感じた。

それはたぶん、両親に負担をかけたくないという現れだと思った。受かった報告を両親に伝えたとき、喜んでくれた。でも、少し残念そうな顔をしたからもっと罪悪感が増した。

お母さんはその気持ちに気付いて知らずか、

「自分が思うように生きなさい。」
と言ってくれて、心が楽になった。

それから、お父さんやお母さんとこれからのことについてよく話すことができた。寮に入った当初は、ホームシックだったり、知り合いが誰一人といないところでやっていけるのかと、不安を抱いて過ごしていた。お父さんやお母さんには悪いけど、やっぱりB高校にしとけば良かったと思うこともある。

でも、自分がどうしても行きたくて頑張ってることができたA高校。お父さんとお母さんに負担をかけて入った高校。って考えたとき、頑張ろうと思える。そして、少しでも負担をかけまいと無駄遣いをしないように心がけようとも思う。

寮での生活も早、七カ月目を目前としている。二、三カ月に一度しか会えない分、電話の回数が増えている気がする。口答えばかりしてはいるけど、何でも相談できるようになって、お母さんの自分に対する思いにも気付

くことができたと思う。私にとってお母さんは、大きな存在で、一番の味方だ。

これからは、親孝行できるように勉強を怠らず、自分が思うように生きていきたいと思う。